

【論文】

「交流型 IPE (InterProfessional Education)」の
プログラム開発経験による学び
—会議録のテキスト分析より—

佐伯 知子・奥菌 淳二・角山 香織・種村 文孝・渡邊 洋子

Study on the Experience of Developing the Interactive IPE Program:
Text Analysis of the Minutes

Tomoko SAEKI, Junji OKUZONO, Kaori KADOYAMA,
Fumitaka TANEMURA, Yoko WATANABE

1 はじめに—交流型 IPE とプログラム開発

本論は、多領域から成る専門職者たちが「交流型 IPE (InterProfessional Education)」のプログラム開発経験から何を学んだのか、会議録のテキスト分析を通じて具体的に検討しようとするものである。

これまで医学領域を中心に展開されてきた IPE の多くは IPW (InterProfessional Work) を前提としたものであった。したがって IPE は主として、仕事で連携・協働する上で必要な他の専門(職)性に対する理解、また理解しようとする姿勢・態度の育成を志向するものであったといえる(これを本研究では「IPW 直結型 IPE」と呼ぶ)。

これに対し、筆者らが注目するのは、必ずしも W(仕事)に直結しない IPE(「交流型 IPE」と呼ぶ)である¹。専門職教育においては、プロフェッショナリズムのように職種を問わず議論できる(すべき)課題があるのではないかと。また、専門的知識や技術の習得に重きが置かれる専門職教育は、そうであるがゆえに陥りがちな問題性や限界性を共通して抱えているのではないかと。いくらか考慮すれば、共に働くことを前提としなくとも、専門職全体で領域横断的な議論を展開することの意味は大きいことがわかる。加えて、他領域と交流することは、共通点だけでなく「違い」に気づくことでもある。それらの気づきは、自らの専門職の背景にある文化や価値をあらためて見つめ直す機会にもなるであろう。ふだん接点のない職種同士であればなおさら、交流が多くの気づきをもたらすのではないかと。交流型 IPE には、IPW 直結型 IPE だけでは実現し得ない意義や可能性が期待されるのである。

多様な専門領域から成る筆者ら(各々のバックグラウンドについて詳しくは後述)の活動は、こうした問題関心から出発した。2014 年 4 月より不定期で、各自の専門領域に関する情報交流はもとより、日々の仕事のこと、現代的・社会的な課題や専門(職)性とは何か等、さまざまなテーマについて議論を重ねる形での「交流」活動を継続してきている。筆者ら自身がまずは手探りで交流型 IPE を実践してきたといえよう。

本論は、このような筆者らの交流型 IPE 活動の中でも特に、交流型 IPE のプログラム開発経験に焦点を当てるものである。現段階で筆者らが行なっているような交流型 IPE の試みがほとんどないのと同様に、交流型 IPE のプログラム開発も管見の限り行なわれていない²。そうした中、筆者らは、挑戦的な試みとして交流型 IPE のワークショップ「InterProfessional（多職種連携・異業種交流）からプロフェッショナルリズムを考えるー木に関わる専門職の協業を手がかりにー」（以下、WS）を企画し、2015 年 10 月 18 日に実施した。当日は、弁護士や教師から設計士に至るまで多領域の専門職者 28 名が参加し、6 時間ほどの交流活動を行なった（WS の詳細については渡邊論文³参照のこと）。

この WS のプログラム開発経験は、筆者らに、それまで実践してきた交流型 IPE では得られなかった一定の手応えを感じさせるものであった。そこで感じた手応えとはいったい何だったのか。多職種の専門職者による交流型 IPE のプログラム開発とは、いかなる意味をもつものなのか。本論では、筆者らの会議録を WS 実施前と後とに分けて比較分析することにより、このことについて具体的に検討する。なお、本論でいう開発経験とは、WS の企画・準備から振り返り・まとめに至るまでの、WS に関わる作業プロセス全体を指すものである。このプロセスのうち WS 実施日を比較の際の区切りとするのは、それが筆者らのプログラム開発経験において最も重要な転換点であったと考えるためである。企画したものを実践に移すことで想定外の出来事に直面したり、WS 参加者との交流を通じて新たな気づきが得られたりと、WS 当日は、プログラム開発における一連の作業の中でも極めて多くの刺激を受ける機会であったといえる。そのため、プログラム開発経験による筆者らの変化を読み取る上で、最も適当であると判断した。

2 方法

地理的に離れた場所で働いている筆者らは、できる限り頻繁な「交流」活動を行なうために、インターネットのチャット機能を活用した。具体的に用いたのは、google 社が提供するハングアウトである。このシステムの活用により、WS のプログラム開発においても細かい議論を重ねることができ、なおかつその議論をそのまま文字データとして記録に残すことができた。

本論で分析するデータは、表 1 に示すとおり、このチャット会議の全会議録、ならびに「メール A」「振り返りアンケート」である（以下、これらを総称して「会議録」とする）。「メール A」とは、メンバーの一人がチャット会議に参加できなかった時に別途メールで意見を述べたものであり、「振り返りアン

表1 分析データ一覧

	年月日	種別	所用時間
WS前	2014年11月22日	チャット会議(1)	1時間36分
	2014年12月3日	チャット会議(2)	1時間33分
	2014年12月17日	チャット会議(3)	1時間47分
	2015年1月14日	チャット会議(4)	1時間38分
	2015年6月26日	チャット会議(5)	1時間58分
	2015年8月22日	チャット会議(6)	2時間03分
	2015年8月30日	チャット会議(7)	2時間00分
WS後	2015年11月20日	チャット会議(8)	1時間38分
	2016年1月19日	チャット会議(9)	1時間10分
	2016年3月3日	チャット会議(10)	1時間37分
	2016年3月4日	メール A	
	2016年3月7日	チャット会議(11)	1時間42分
	2016年3月28日	チャット会議(12)	1時間34分
	2016年4月13日	チャット会議(13)	1時間33分
	2016年6月16日	チャット会議(14)	1時間45分
	2016年8月8日	チャット会議(15)	1時間46分
	2016年11月16日	チャット会議(16)	1時間15分
	2016年12月2日	振り返りアンケート	

ケート」とは、活動の振り返りのために筆者らが自分たちで作成・回答した自由記述式のアンケートである。本論では、これらの会議録のテキスト分析から、筆者らの交流型 IPE プログラム開発経験が筆者ら自身に何をもたらしたのかを客観的に評価する。

会議録における発言数は膨大であるため、発言の変化を読解のみでとらえることは非常に困難である。よって、まず、KH coder を用いたテキストマイニング⁴、具体的には各参加者の発語数の違いに着目したコレスポネンス分析を WS 実施前の会議録と WS 実施後の会議録を対象として行ない、それぞれでメンバーに特徴的な語を客観的な形で可視化するとともに、WS 実施の前後でその特徴に変化がみられるかを検討する。その後、会議録を詳細に分析することにより、それぞれの変化にはどのような意味があるのか、全体としてどのような変化の傾向があるのか、具体的に検討する。

次に、本論で分析対象とするメンバーは、奥蘭・角山・佐伯の 3 名である。表 2 に示すとおり、3 名はそれぞれ政治学・薬学・教育学を専門とする、海上保安官、薬剤師、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成校に勤務する大学教員である。なお、活動メンバーにはほかに種村・渡邊（いずれも専門は教育学）の 2 名がいるが、種村は会議の進行役、渡邊は活動の代表者という役割に基づく発言が多く、全員を分析対象とすると、進行やまとめのための言葉とそうでない言葉との対応関係が際立ってしまう結果となった。そのため本論では、こうした特

殊な位置づけを持った者を分析対象から外すこととした。

なお、コレスポネンス分析にあたっては、10 回以上用いられた単語に絞ることとした。この結果、分析対象の総単語数は、WS 実施前の会議録で 13,858 語中 4,847 語、WS 実施後で 16,315 語中 5,689 語となった⁵。

表2 分析対象の属性

		奥蘭	角山	佐伯
①	自身の専門	政治学	薬学	教育学
②	養成に携わっている専門職	海上保安官	薬剤師	保育士・幼稚園教諭・小学校教諭
③	②の専門職の免許・資格の有無	有	有	無
④	②の専門職としての実務経験年数	3.5年 (2.5年：巡視船航海士、1年：外郭団体研究員)	11年 (薬剤師業務に加え、リスクマネジャー・人事等を担う副部長)	—
⑤	②における教育経験年数 (2016年度10月時点)	5年	8年 (うち3年：週1回病院出向(調剤・服薬指導等の病院業務))	8年半

3 結果と考察

(1) コレスポンドンス分析結果

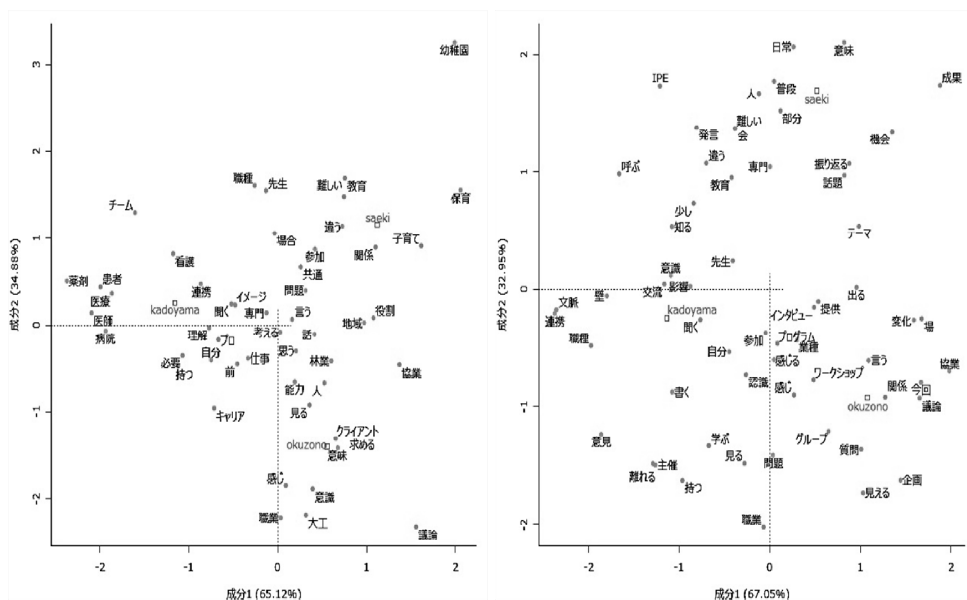


図1 WS前(左)とWS後(右)のコレスポネンス分析結果

(2) 考察

交流型 IPE プログラム開発経験は、メンバーに何をもたらしたのか。以下、図 1 のレスポンス分析結果を手がかりに、特徴的な変化の様相を捉えていきたい。

① 専門領域固有の言葉

まず注目されるのは、WS 前においては、各々の専門領域固有の言葉が目立つことである。角山でいえば「薬剤」「患者」「医療」、佐伯でいえば「幼稚園」「保育」「子育て」といったものである。WS 前は、各々の専門領域に関する会話が多かったことがわかる。また同様の観点からみれば、WS 前の奥菌に特徴的な「意味」という言葉も注目される。発言内容を見ると、他のメンバーの発言の趣旨や言葉そのものの意味を尋ねたり確認するために用いられていることが多いのである（ちなみに、WS 後の佐伯の特徴語である「意味」は、「ある意味」等の形式的な用法であった）。

WS 後になると、これらの言葉はほとんど用いられなくなっている。WS での出来事がどこまで影響を与えているのか、この分析結果のみで明言はできないが、少なくとも、WS の開発プロセスを経る中で筆者らは、各々の専門領域に関わる情報を交流し理解し合おうとする段階から、ある程度を共有する段階に移行したと捉えることはできよう。

② WS の中で話題になった言葉－「壁」「先生」

WS では、前半の話題提供（木に関わる専門職の協業）を受け、後半は 4 つのグループに分かれての討議が行なわれた（筆者らも別々のグループに属して議論に加わった）。WS 後の結果をみると、このグループ討議で話題となった言葉をいくつか確認することができる。よって次に、筆者らの中でこれらの言葉がなぜ言及されているのか、またこれらをめぐってどういった議論が展開されているのか、みていきたい。なお、筆者らは WS の後、各グループ討議の録音を聞き、所属していないグループの内容も共有した上で振り返りの議論を行なっている。

まず、「壁」という言葉である。1 つのグループでキーワードとなっていた「権限の壁」という言葉から話題に上がったものである。同グループでこれは、自らの専門性の技術的裏付けとなるもの、領分を明らかにするものといった意味で用いられていた。専門職ならではのトピックといえるものでもあろう。WS 後の分析結果からもわかるように、この言葉に最も反応したのは角山である。

薬剤師でいったら、医師の処方内容が適切でないとっても、修正案の提案は出来ても、薬剤師自身では修正できない、といった権限の壁、資格として与えられているやれること、とやれないこと、といったことも入るでしょうか。でも、その壁があるからこそ、専門職、の専門性がどこなのかも、わかるのでしょうか。必要な壁、だけど、時々、連携を阻害する壁なんですかね（2016/1/19）。

角山が「権限の壁」という言葉に注目したのは、それが薬剤師の職務に当てはめた場合に何を意味するのか、考える手がかりとなるためである。その中で、それを WS での定義づけ同様、専門性を担保する「必要な壁」としつつ、さらに思考を発展させ、「連携を阻害する壁」にもなりうるのではと問題提起するのである。こうした角山の発言を受け、チャット会議では、それが役割分担等で連携を促しているのも事実であるため 2 つの壁は「同じ壁の裏表」のようなものではないか、そうした状態にあることこそが専門職性の本質ではないか、といった議論が展開された。

次に、「先生」という言葉も取り上げておきたい。図 1 をみると、この言葉は WS 前にもみられるものだが、WS 後には 3 名それぞれが一定程度発した言葉となっていることがわかる。WS 内での「先生」という呼称に関するいくつかの発言をふまえ、筆者らの中であらためて議論が展開されたためである。

WS 内で言及されたのは、各々がイメージする「先生」と呼ぶ職種や、「先生」と呼ぶことの正当性について等である。これをふまえ筆者らは、「先生」と呼ばれる職種とそうでない職種についての線引きについて検討し、そこから専門性とは何かということを議論している。内容の妥当性については今後検証する必要があるが、たとえば、比較的新しく確立された職種が「先生」と呼ばれるのではないか、「先生」という呼称は必ずしも専門性の高低とは関係しないのではないか（たとえば、海上保安官は高度な専門性が要求されるが「先生」とは呼ばれない）、「権限を尊重すると『先生』という表現がなじみやすく、権限の壁を破ろうとすると『先生』はナンセンスになる」（2016/3/7、渡邊）のではないかなど、さまざまな角度から意見が出され議論が展開された。

以上をみると、他職種との交流を通じて得られた論点やキーワードが、自らの専門職は相対的にどう位置づくのか、あるいは専門（職）性とは何か、といったことをあらためて

検討する手がかりとなっていることがわかる。WS 後において筆者らは、自分たちだけで議論をしていた段階よりもより広い視座から、考えを深化させる機会を得たといえよう。

③ WS の経験と仕事とのつながりを議論する言葉-「日常」「普段」「変化」「文脈」「離れる」

IPW 直結型 IPE や異業種交流会とは対照的に、WS での経験を仕事にどうつなげようとするか（あるいはどうつながるものと理解するか）は、「交流型」の IPE における一大テーマといえるのではないかと。図 1 の WS 後にみられる「日常」「普段」「変化」「文脈」「離れる」といった言葉は、それぞれの発言内容をみると、この問題をめぐって用いられる傾向が高いことがわかる。以下、これらの言葉を軸に、筆者らが WS の経験と仕事とのつながりをどのように捉えているのか、分析していきたい。

まず、「日常」「普段」「変化」である。WS 後のフォローアップ調査（参加者数名に対するインタビュー調査、詳しくは後述）の計画段階では、「ここでの（WS での一引用者）成果物がどういう形で存在していれば、成果が日常の中に入りこめるのか」（2015/11/20、佐伯）や、「参加者や話題提供者になんらかの変化があったか、を聞くのは大事だと思います。ワークショップが何かのきっかけになりえたのか」（2016/3/3、奥菌）のように、WS の経験が普段の仕事とつながること、何らかの変化をもたらすことを期待する形で用いられていることが多い。WS 後の佐伯の特徴語として「日常」「普段」があり、奥菌の特徴語として「変化」があるのは、こうしたこだわりによるところが大きい。

しかし、関連する言葉に注目して WS 後の議論をたどると、これらの認識が徐々に変容していく様がみてとれる。現段階での到達点から先に確認しておくと、3 名が最終的な振り返りアンケートの中で示している見解は、それぞれ次のようなものとなっている。

仕事に劇的な変化が起これないと割り切ってもいい（2016/12/2、奥菌）。

ワークショップでの経験はなかなかすぐに日常業務にはつながりにくい・・・（中略）激動の毎日の中ですぐに忘れてしまう（2016/12/2、佐伯）。

知らない世界を知った、だけに留まらない当日の興奮や感動を日常の仕事にどうやって反映させるのかと思っていたが、仕事にはそんなに簡単には反映させられないものだと逆に割り切ってしまうのもいいのではないかと（2016/12/2、角山）。

3 名の見解は極めて似たものであるといえよう。すなわち 3 名は、WS での経験を「日常業務」「日常の仕事」に「つながりにくい」「反映させられない」ものであり、「劇的な変化」は「起これない」ものとする。そうした事実を受け止め、むしろ「割り切ってもいい」というのである。当初の期待やこだわりとの違いは明らかである。

では、こうした違いはいつ・どのように生じたのか。結論からいえば、参加者へのフォローアップ調査が大きく影響したものと考えられる。同調査は、WS から半年後、5 名の参加者に対し行なったインタビュー調査である（2 名は個別、3 名は集団での実施）。こちら側から WS に関わる資料を提示することを極力避け、対話をすすめる中でできる限り参加者自身が記憶の糸をたどり、WS での経験をめぐって感じたこと・考えたこと等を自由に話すという非構造化インタビューの形をとった。

この調査において WS での経験は、「利害関係のない、何が起こるか分からない、きれい

な血 (金銭面を意識せず純粹に仕事のことを考える状態のたとえ引用者)、商売から離れて等のようなことば」(2016/12/2、奥菌)で表現された。つまり参加者は、普段の仕事とまったく離れた機会であることにこそ価値を見出していたのである。角山はこの結果を受け、次のように述べている。

日常の中で立ち止まって考えたり、専門職である自分がどうしたいのか、とかどうすべきなのか、とか、時々考える時間をもつていうのは、どんな専門職でもやっぱりどこかで欲しているのかな、と私は思いました (2016/6/16)。

このようにフォローアップ調査を一つの契機として、筆者らは、WS での経験と仕事とのつながりに対する認識を徐々に変化させていった。職場の文脈を離れてみることで、まずはその行為自体に意味があるのではないかと。WS 後の分析結果に出てくる「文脈」「離れる」という言葉も、こうした議論に関連するものであった。

「ときどき思い出して『プロとは』とかを考え続けられるようにしたらよいのではないか」(2016/12/2、角山)というのは、WS に関わる一連のプロセスをあらためて振り返った今の時点で、筆者らが共有している思いである。普段の仕事とは直結しにくいことを、ある意味「割り切って」受け止める。しかし、意図的な場は設定し続ける。その際、場を作り込み過ぎないように留意しつつも、最低限おさえておくべき仕掛けは用意する。こうした見通しをもつようになったのは、WS 後における大きな変化であった。

④ プログラム開発を通じた認識の変容を象徴する言葉－「振り返る」「学ぶ」

「振り返る」という言葉は、WS 後の議論の中でかなり上位の頻出語となっている。発言内容をみると、単にプログラム開発上の一手順として言及されるのみならず、筆者らが振り返りという行為そのものの意義や可能性に気づき、発言数を増やしていることが特徴的である。実際、本プログラム開発をめぐり、筆者らは大きく 2 つの次元で振り返りの手応えを感じることができたといえる。(1) フォローアップ調査を通じた参加者の振り返りプロセスへの参与経験、(2) 自分たち自身がやってきたことを振り返る一連の行為、である。

(1) については、WS から半年後という時期にフォローアップ調査を実施したことの影響も大きい。というのも、いずれの参加者においても、WS の内容についてほとんど覚えていない状態から始まるものの、記憶を掘り起こすプロセスの中で、あらためて自分自身および自分自身の仕事と向き合う、という姿を捉えることができたのである。たとえばある参加者は、WS 当日、自分と同じ専門領域の参加者ではなく、教育に携わっている参加者の発言の方を気にしていたことを思い返していた。というのも当時、専門職養成の教員になったばかりであり、教員としてどうすればよいのか、思い悩んでいた時期だったからだという⁶。この参加者からは、振り返りのプロセスを通じて、当時の自分が置かれていた状況と現在の状況とを対比させ、自らの成長をたどるような姿をみることができた。こうした中で、筆者らは、「振り返りが半年経った後でも有効である」(2016/12/2、佐伯)ことや、半年という時間が経過しているからこそ生まれる意味もあること⁷等、振り返りの効果や重要性をあらためて認識するようになったといえる。

(2) について、筆者らは、チャットや対面での会議を通じ、WS 後やフォローアップ調

査後といった節目節目において、何が印象的だったか、何が成果で何が課題と感じたか、といったことを出し合う形で振り返りを行なってきた。それは、交流型 IPE のプログラム開発という挑戦的な試みの中で、現状や課題を適切に捉え、自分たちの立ち位置や今後の方向性といったものを絶えず確認する意味で、必要不可欠なプロセスであったといえる。とはいえこのプロセスは、「企画段階は学ぶ余裕がない。振り返りの方が学ぶことが多い」(2016/12/2、奥菌)といった発言に象徴されるように、「振り返る」という行為そのものに対して、筆者らの目を開かせるものでもあった。奥菌や角山の発言からは特に、そのことが強く読み取れる。

振り返り＝復習という認識は完全に崩壊した (2016/12/2、奥菌)。

企画をするだけではなく、責任をもってやってみて振り返るというところまでが重要なのではないかと (同)。

振り返りの重要性を知った (今の若い薬剤師、薬学生は臨床実習や病棟活動を通して振り返りの機会を持つことが増えているが私の時代には意識しての振り返りはほとんどなかったように思う) (2016/12/2、角山)。

奥菌と角山は、開発プロセスを通じて、自らのこれまでの学習経験における「振り返り」とは異なる価値を体感し、振り返りに対する認識そのものを変容させているのである。

また、これに関連するところで、WS 後の頻出語として出てきている「学ぶ」という言葉にも注目しておきたい。この言葉については、教育学を専門とする佐伯ではなく、奥菌と角山の特徴語となっている点が極めて興味深い。この点について対面で議論を行なったところ、奥菌と角山は、交流型 IPE の活動を通じて「学ぶ」という言葉を意識的に用いるようになった、とのことであった⁸。

このことは、「IPE とは何か、ということがもっと明確になると期待していた」「ある程度の知識や教育方法が分かるようになってと思っていた」(2016/12/2、角山)といった WS を企画する以前の「期待」と照らしてみても、考えさせられるものがある。結果として期待通りの「答え」は出なかったわけであるが、それは「何も学ばなかった」ことではないのである。奥菌や角山が WS 後に「学ぶ」という言葉を意識的に使うようになったのは、振り返りをはじめ想定とは異なる形でさまざまな手応えを実感する中、自身の(所属する専門領域も含めた)既存の価値観や諸前提と向き合い、認識を変容させた結果といえよう。WS 後に多くの場面で投げかけられた「主催者が一番学んだのではないか」という問いには、そうした意味が込められているようにも思われる。

4 おわりに

本論では、交流型 IPE プログラムとしての WS の開発経験が、多様な専門職から成るメンバーに何をもたらしたのか、会議録のテキスト分析により考察した。結果として、IPE をめぐる新たな論点と関連する論議、WS と仕事とのつながりに対する見通し、学びというものに対する認識等、さまざまな次元での変化を確認することができたといえる。これらの知見をふまえ、交流型 IPE において鍵となる要素やプロセス等を抽出することが一連の

プログラム開発における次の課題である。

最後に、筆者らの試みは新しく挑戦的なものであるため、今回の経験をふまえ、交流型 IPE プログラム開発をめぐるいくつかの論点と課題を整理しておきたい。

第一に、交流型 IPE の活動としてプログラム開発を行なうことについてである。言うまでもなく、交流型 IPE においてプログラム開発は必須の活動というわけではない。実際、筆者らは、各自の専門領域に関わる情報交流やそれぞれの勤務校の訪問など、プログラム開発以外の交流活動も行なってきた。そうした中でも、今回のプログラム開発経験は、「主催者が一番学んだのではないか」という実感をメンバー全員が共通して抱いたように、大きな手応えを感じることができるものとなった。この点について、交流型 IPE という観点からみれば、背景の異なる専門職者がプログラム開発という容易ではない共通課題に取り組むことで、短い期間の中で各々の価値観や専門文化を分かち合える濃い交流ができたように思われる。加えて、開発者という責任ある立場に立つことにより、普段ゆっくり立ち止まって考えることのない課題と向き合わずにはいられない状況も作り出されたといえる。こうした点をふまえると、プログラム開発を行なうことは、交流型 IPE の有効な手段の一つであるといえるのではないかと。

第二に、開発するプログラムが交流型 IPE であることについてである。そもそもプログラムを開発するということは、何を目的とするのか、そのために押さえるべき要素は何か、といった問いと絶えず向き合うことである。その際、それが交流型 IPE のプログラムであれば自ずと、専門職であること、専門職同士がつながること、純粋な交流という形をとること、といったことのもつ教育的効果や可能性について深く考える機会となる。つまり、交流型 IPE そのものの哲学や原理を考える絶好の機会となるのである。また、今回そうであったように、プログラム参加者から出てきた論点やキーワードはまさに、筆者らが今後向き合うべき課題でもある。交流型 IPE の実践により多様なトピックを収集・整理することは、試行段階のプログラムをブラッシュアップさせる上で必要かつ効果的な営みであるように思われる。こうしたことから、開発するプログラムが交流型 IPE であることの意味は大きいといえるだろう。

第三に、今後、専門職「教育者」に特化したプログラム開発を行なうことの可能性についてである。既に述べたとおり、筆者らにとって今回のプログラム開発は、既存の学習観の変容を促すような経験となるものであった。結果として奥菌と角山は既に、勤務校において授業終了時に振り返りを実施するようになったり、自主ゼミで学生主体のプロジェクトを企画することになったりと、WS での経験を実践場面に活かす試みを始めてもいる。このように IPE の成果をすぐに実践へと反映できるのは、彼らが専門職を育てる教育者でもあることも大きく関係しているのではないかと。また、「違いを挙げればきりが無いが、専門職教育という営みに誇りと迷いを共存させているというのが、最も重要な共通点だと考える」(2016/12/2、奥菌)、「人を育てる、とか、プロに育てる、といった観点では、比較的悩みどころは似ているのかな、と思ったりする」(2016/12/2、角山)といった振り返りでの意見をみても、専門職教育者同士の交流型 IPE プログラム開発は、前向きに検討してみる意義があるもののように思われる⁹。

-
- 1 「交流型 IPE」および「IPW 直結型 IPE」の着想に至る経緯について詳しくは、渡邊洋子「InterProfessional Education の意味と可能性ー専門職／専門職教育者の新たな学びー」『京都大学 生涯教育フィールド研究』（第 2 号、2014 年、pp.3・8）を参照のこと。
 - 2 IPW 直結型 IPE については、養成課程のカリキュラム開発に関わるものを中心にわずかなではあるが報告されている（たとえば、田村由美「多職種連携およびそのための教育のあり方について：IPE,その実践とカリキュラムの開発」『川崎医療福祉学会誌』（23(1)、2013 年、pp.199-206)等）。しかし、開発経験それ自体に着目した文献は、管見の限り見当たらない。
 - 3 渡邊洋子・奥・角山香織・佐伯知子・種村文孝「IPE 基盤型専門職教育プログラムの開発プロセスと課題」『京都大学 生涯教育フィールド研究』第 5 号、2017 年、pp.21-29。
 - 4 樋口洋一『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版、2014 年。
 - 5 なお、会議録に登場する単語のうち、チャット会議特有の単語や互いの名前など、分析と関係ない以下の単語は「使用しない語」として KHcoder によって自動的に排除させる手続きとした：正直、そうですね、笑、なるほど、すみません、皆さん、なんか、奥、奥、角山、種村、佐伯、渡邊、x87@、x87B。x87@、x87B については、KHcoder での分析の過程で生じた文字化けによるもの。たとえば「～」は仕様により文字化けを起こす。このような現象については、会議録そのものを改変するのではなく、文字化けを分析から排除する形で対処した。
 - 6 「IPE 研究会 2015 年度公開ワークショップに関するインタビュー調査記録」2016 年 5 月 12 日。
 - 7 「2016 年度 第 2 回 IPE 研究会 議事録」2016 年 5 月 13 日。
 - 8 「2016 年度 第 8 回 IPE 研究会 議事録」2017 年 1 月 19 日。
 - 9 なおその際、今回の経験は特に、非教育学系の専門職教育者に大きな認識変容をもたらしたが、交流型 IPE における教育学系と非教育学系の専門職教育者の交流がもたらす意味についても、ひとつの論点として検討していきたいところである。